

口蹄疫が残したものの

小嶋 聖† (宮崎県獣医師会・パソベッツこじま院長)

宮崎県の中央部に位置する児湯郡川南町に獣医師の妻と開業し8年目を迎えた。病院は、町の中心部から随分離れた山側に位置する。病院の周囲には目立った目印もなく、不安になるくらい山手に入り込むため、初めて来院される患者さんは迷子になる方が多い。診療対象動物はエキゾチックから産業動物まで幅広く診ており、病院を空けるときの以外は原則無休で、夜間も必ず電話を受けるように心がけている。

病院の基本方針は十分なインフォームドコンセント、飼い主の立場に立った獣医療の提供、動物たちの苦痛を取り除くことである。そのため、開業当初から予約制として1日の診療件数は限られるが、1件あたりの診察時間を十分に確保している。最近では、電話予約がしっかり守られ遠方の患者さんも随分増えた。時間はかかったが、ど田舎の病院としては充実してきたところだった。

そんな矢先の昨年4月、隣町の都農町で1例目の口蹄疫が発生し、その翌日には本町で2例目が発生した。その後、あっという間に川南町は口蹄疫の渦に巻き込まれた。結果的に児湯郡の一部を除き牛と豚が全て姿を消した。宮崎県下で処分された家畜は約29万頭にも及び全国の畜産業者を恐怖のどん底に陥れた。

私自身、5月20日から6月30日まで牛の殺処分に従事し、地元の家畜の命を絶ち続けた。多いときは1日で約200頭の命を自身の手で絶った。農場に出向くと、泣き崩れる生産者やその家族、牛舎に供えられた花束やお神酒。殺されることを察したかのように、ジッとこちらを見る牛たち。日頃からお世話になっている生産者の大切な財産を……、一方で国内の畜産を守るためと複雑な心境の毎日で正常な精神状態を保つのが大変だった。ある日、私が1月前に難産で往診した農場へ配属された。その生産者は、最初から最後まで殺処分の作業を手伝ってくれた。半分位処分が終わった頃繋ぎ場に連れてこられた親子の牛を指差して「この子、先生が助けてくれたやつだ」と言われた。殺処分に従事して10日位経っていたが、それまでなんとか自分に「仕事」と言い聞かせて淡々とやってきた。しかし、この時ばかりは、頭が真っ白になりどうしようもなく涙が溢れてきた。「先生！うちの牛たちは最後まで先生にお世話になってよかったと思う！」、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにした畜主に

声をかけてもらった。気持ちを落ち着かせ残りの作業を終えた。牛舎の横の大きな穴に親子が隣り合わせに（親牛が子牛を抱き寄せるように）並べられていた。重機オペレーターのちょっとした気遣いだった。生産者が土を盛る前にお神酒を濯ぎ入れ声を掛け合うわけでもなく作業者全員が手を合わせ黙祷した。こんな光景の毎日いくらか処分がはかどろうとも充実感は全くなく、疲労感と虚しさだけだった。

記録に残さずとも1年が経つ今も、1件1件の農場であったことを鮮明に記憶している。この記憶は私の体中の細胞に刻み込まれ、生涯記憶から消し去ることの出来ない悪夢のような事実である。

1年が経ち、ようやく冷静に当時を振り返ることができ、たくさんの問題点が見えてきた。獣医師会としての役割、獣医師個々の振る舞い、情報伝達不足、関係組織との連携、法律の不備、生産者の意識……、挙げればきりが無い問題点。少しずつ改善されようとしている。しかし、現場の臨床獣医師の声がしっかり反映されているのか甚だ疑問である。今回の口蹄疫では、当初から道路封鎖、早期の予防的殺処分、ワクチン接種など地元の臨床獣医師から多くの要請・要望があったにも関わらず受け入れられなかった。殺処分従事者についても公務員の方々を中心に慣れない作業が続き滞ってしまってから臨床獣医師が派遣された。口蹄疫発生から復興の現在に至るまで、我々臨床獣医師はどこか置き去りにされているような感があるのは私だけだろうか？

現在も飼育再開が思うように進んでいない。その理由

小嶋 聖

—略歴—

- 1995年 酪農学園大学獣医学科卒業
- 1999年 山口大学連合獣医学研究科修了
- 同年 協和発酵工業(株)安全性研究所勤務
- 2002年 (株)新日本科学安全性研究所勤務
- 2003年 パソベッツこじま開業



† 連絡責任者：小嶋 聖 (パソベッツこじま)

として資金不足、後継者不足、堆肥処理施設の不備、震災を含む社会情勢の不安、飼料用穀物の高騰などがある。当然、再開した農家も同じような不安を抱えたままの再出発であり苦しんでいる。さらに産業動物を診る我々も再開が進まなければ生活を維持するだけの収入が得られない。あまり公にされていないが殺処分、終息後の生活や収入の不安などから生産者・獣医師共に健康や精神的に病んでいる者も少なくない。

一方、県内でも殺処分を免れ経営が継続されている地域がある。牛が残ったことは幸いだが口蹄疫発生中、出荷停止処置のため収入がなく借り入れでしのいだ農家も多かった。また、人工授精業務も停止されていたために今年の年末頃からセリに出荷する子牛がいなくなる。これに対する補償はこの原稿を執筆する時点でなんら行われていない。さらに家畜の放射能汚染問題で枝肉価格は

暴落し、畜産農家は大きな危機にさらされている。

是非、この現状を全国の獣医師に知っていただきたい。現在は往診依頼が激減し、今後の診療活動にも大きな不安を抱えたままである。現状維持し当面の間のいにくのか、あるいは大きな方向転換が必要なのか？ 悩みながらもわずかばかりの診療依頼に全力を尽くしている。

学生時代に「峠を越えなさい、峠の向こうに何かがある」と恩師からいただいた言葉。この言葉の重みを感じながら今立ちはだかる大きな壁をどうすれば乗り越えられるのか？ もがき苦しむ毎日である。

口蹄疫の際、全国の方々から人的、物的支援さらにはたくさんの義援金をいただいたことに心より感謝申し上げます。また、東日本大震災で被災された皆様には、お見舞い申し上げますと共に、1日も早い再生復興をお祈り申し上げます。